

遠い過去に死んだ女

貫咲賢希

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人格破綻者言峰綺礼の妻が死に際。これはそれだけの話。

目次

遠い過去に死んだ女

冷たい石の部屋に私は横たわっていた。

外は雨。深々と微か雨音だけが部屋の中に響き、湿気がただよう部屋にはまるで自分しかいないように思えた。

だがいる。たしかに。寝ている私の隣には夫が立っていた。

二年間。それが彼と過ごした時間だった。

短い期間だったが、私にとつてのそれ以外の時間は、文字通りいつ死に絶えておかしくないほどの時だった。苦悩もあつた。絶望があつた。

しかし、その二年間だけは幸せだった。それが、最後に私が胸に灯つた気持ち。

病に冒され、衰弱した女。体はやつれ、肌も髪を艶を失い、唇にさえ生気のない私。

けれども、それがたとえ歪だつたとしても、夫はまだ美しいと言つてくれた。

それが嬉しかった。

助かりたいとは思わなかつた。私の病は死の道しるべ。それは随分前から決まっていたこと。今更妨げることには何の意味がある。

私は夫に細い腕を差し出した。夫は何も言わなかつた。

夫はこうでも思っているのだろう。

腕を掴み、へし折つてやろうかと少し考え、考えた末、ただ、それはあまりにあっけな過ぎで、きつと楽しくないだろうと思つたのだ。そして私は腕を折られたくらいでは嘆くまい。

そう、私の夫は歪だ。

けれども、それは私も同じだった。

似たもの夫婦だと思つとすこし幸せな気分になる。

だから、夫はいつまでも変わらぬ冷たい声で、私にに告げた。

彼にとつては事実を。その真実だけを。

「私にはお前を愛せなかつた」

私は微笑んだ。残念なことに夫は目を逸らした。すこし寂しい。

「——いいえ」

それでも、私は言葉を紡ぐ。夫は聞きたくなかったようだが、仕方なさそうに私に振り返ってくれた。それがただの義務と思っていた行動でも、私は嬉しかった。

「貴方はわたしを愛しています」

私は夫に救ってもらった。

私は微笑もうとした。夫は表情を変えないので、うまくできているか不安だ。

血を吐き出す。白いシーツを私の血で赤く染める。

夫の顔は変わらない。

そんな人だ。私の夫は、そんな人なのだ。

外は雨。暗い空の下、私が死ぬのだろう。私の夫はその情景を、ただ眺めていた。

視界がぼやける。意識が今にも消えそうだった。

でも、私はできるだけそれに抗う。

一秒でも長く、この人と過ごしたい。

きつとこの夫は諦めているのだろう。

それでも、無様に、みつともなく、消えかかる蠟燭のように激しく命を燃やす。

だって、私はこの人を——。

「ほら。貴方、泣いているもの」

視界がぼやけたのでそう見えた。

ここからは時間にして一瞬。

きつと、これは走馬灯なのだろう。

《被虐霊媒体質》と呼ばれる異能を私は持っていた。悪魔に反応しその憑依者と同じ霊障を体現する力。その力を使い、悪魔祓いにおいて初手、そして最大の難関とされる隠れた悪魔を見つけ出す段階において、自らの傷を持って悪魔を探知していた。

このため、常に生傷が絶えなかった。元々、体が丈夫でなかったため、癒えぬまに体を壊し、そのため免疫もできず、病にかかったのだろう。

人生を呪った。

ああ、神よ。なぜ、私だけこのような目に遭うのでしょうか？ あまりにも悲痛ばかりではありませんか？

いつしか、自分の手で命を落とす、そうなのだろうと思ってきた。彼に逢うまでは……。

聖遺物の管理・回収を任務とする第八秘蹟会に席を置いており、彼の父はまさに信仰者の鏡である人で、周りもその息子は重ね垂れた経歴に眩み、そうであると認識していた。

けれど、私は、違うと思っただ。

彼はどこか歪だった。他の人間が幸せであることを幸せと感じず、悲しいとあることを悲しんでいないように思えた。いや、きつとそうなのだ。なぜなら、他の人が何かを感じる時、貴方だけはどこか虚ろだった。

歪な人格破綻者。きつと、彼の正体はそうなのであろう。

でも、だからこそ、私を見つけてくれたのだらうと思う。

他の人間は聖女と言いながら、まるで腫れものを扱うように接した。

けれど、彼だけは違った。彼だけは人並みに接してくれたのだ。

涙があふれた。痛みや苦しみの涙ではなく、幸せの涙だった。

こんな私とすれば、愛することができれば、本来、万人が感じるものを得ることができるとか、そんな打算だったのかもしれない。他の愛するもの同士が求めるように私を欲したのではないのかもしれない。

けれど、それでも、私は嬉しかったんです。

貴方は自分が人と違うことに苦悩していました。でも、その苦悩する姿は、己こそが完璧で汚れないものだと思える者よりも、遥かに人間らしいと感じた。

ますます、貴方のことを想うようになりました。

私は貴方が人を違うことを悩んでいるのを知っていました。もし話しあえば、貴方は自分がどんな人間なのか知ることができたのかもしれない。

しかし、私はそれをしませんでした。

怖かったから？ 夫が化け物になってしまふことを忌避したのか？

違うと思う……………。

私は必死で悩む貴方を愛しいと思う気持ちがあった。だから、私はそのままにした。その姿をもっとみたいと思った。

だから、私も歪なのだ。私自身、心も壊れてる。

けれど、壊れた心でも、幸せを感じれた。

色んなことがあった。味覚のわからない私に合わせて、激辛の食べ物と一緒に食べた。一緒に辛い辛いと言いながらも残さず最後まで食べた。汗を流しながら、黙々と食べる貴方の姿はどこか面白かった。

一度、二人だけで海にいった。とても青い。青い海だった。貴方はそれになにも感嘆してはいなかったようだけど、私はあの景色を二人で見られたことが嬉しかった。もしも、どこか別の場所で暮らせるなら、海の近くがいいと思った。

娘もできた。あなたの子を産めたのは本当に嬉しかった。こんな私にも、何か残せるものがあると、誇らしかった。こんな私が母になったのだ。乳を吸う我が子を見るといつも不思議に思う。

だが、こんな二人の娘だ。真つ当な人間ではないのかもしれないが、しかし、どうか自分らしく生きて幸せを得てほしいと思う。これが親心というものだろう。

……………。

本当は、もつともつと、一緒にいて、いろんな景色を見たかった。

いろんな時間を過ごしたかった。

そうしたら、貴方も私も歪な存在じゃなくなった。もしくは、そろって化け物になっていた。けれど、それでも私は幸せです。たとえば、どんな結末でも、満足して逝くことができたでしょう。

それは望み過ぎだ。あまりにも幸せ過ぎて、罰が当たる。

いや、すでに罰が当たったのだ。だから、私は死ぬのでしょう。

貴方の手で殺しても構いません。

それで、貴方が愉悦に浸り、快樂を得たとしても、私の気持ちは変

わりません。

貴方の正体が悪人で外道だったとしても、何度生まれ変わっても、私は貴方の妻でありたい。

この気持ちを言葉に伝えたい。

それが届いたかは解りません。雨音で消えるか、声がもう出せないか、それとも、もう私は生きているのすら解らない。

けど、この未来永劫、変わらない気持ちを、この世、全てに伝えるように想う。

——綺礼、貴方を愛しています。

◇

私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない。

我が目の届かぬものは一人もいない。

打ち砕かれよ。敗れたもの、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。

休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる

装うなかれ。許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、

光あるものには闇を、生あるものには暗い死を。

休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。永遠の命は死の中でこそ与えられる

許しはここに。受肉した私が誓う。

—この魂キリエに憐れみエレンを—